



2015年度

グループリビング訪問記

自由な暮らし。自分らしくともに住もう。





『地域』とグループリビング…………… P.02

たすけ愛の家

訪問記…………… P.04
概要…………… P.06
建築図…………… P.07

あやめの里

訪問記…………… P.08
概要…………… P.10
建築図…………… P.11

明日への風

訪問記…………… P.12
概要…………… P.14
建築図…………… P.15

COCO たかくら

訪問記…………… P.16
概要…………… P.18
建築図…………… P.19

家計簿…………… P.20

訪問記 著者のプロフィール
グループリビング運営協議会
会員のグループリビング一覧…………… P.22

『地域』とグループリビング

これまでワークショップのタイトルのなかに、『地域』という言葉毎年使ってきました。それはグループリビングにとって『地域』は切り離せない存在だと考えていたからです。このことは毎年ワークショップを重ねながら、また研究を進めながら確信を強めています。「なぜグループリビングに『地域』が大切なのか、グループリビングで大事なものは『地域』よりも介護体制、生活支援体制が整っていることではないのか」と言われたことがあります。最近某有料老人ホームで起こった事件をみても、介護体制、生活支援体制が整っているからと言って、安心な環境にはなり得ないことがわかります。「安心な環境をつくるために『地域』がなぜ大切なのか」について述べたいと思います。

この課題に対して、居住者と『地域』、運営者と『地域』について考えていきます。

まず居住者と『地域』では、少人数で暮らすグループリビングの中だけの関係性に頼っていると、もし人間関係につまずきが生じた場合、退去に至るという残念な結果を招くことがあります。また開設後一定の年数を経たグループリビングの入退去状況をみると、平均的な入居期間はそれほど長くはなく、少人数のグループリビングの中の繋がりだけで暮らすことは、常に変化の波にさらされることになります。高齢者は変化に弱く、新しい雰囲気慣れるのは難しい性質があると言われてます。そのような問題を解決するためには普段から『地域』に重層的な関係性を作っておくことが必要です。いくら介護体制、生活支援体制が整っていても、人とのつながりの実感がもてない少人数の生活は、楽しみや生きがいのない生活になってしまいます。

居住者と『地域』の関係性は、ただイベントに参加したとしても、その場限りで終わることが多く、つながりを築くことは難しいようです。『地域』とのつながりは、当事者が目的を持ち、一定の場所に一定の頻度で集まることができる環境のなかでつくられるものだと考えています。例えば趣味の活動や

ボランティア活動などで、同じ目的があれば話題ができます。交流を深めるためには会う機会を多くすること、単に受け身で参加するのではなく、できる範囲の中で小さな役割を持つことで「共同性」が生まれ、仲間意識が生まれてくるのではないかと考えています。

相対的に若い居住者は、住まいに拘らず、行きたいところに自由に行き、会いたい人に自由に会いに行けます。外部に向かって自由に行動することはたいへんいいことです。しかし高齢化し自分の思うように外出することが難しくなった場合、地域との関係性をどのように維持していくかが問題になります。グループリビングの地域交流スペースで関係性を構築、維持できれば、身体状況が良くなくても、入退院を繰り返しながらも参加でき、地域住民とのつながりの期間を長くすることができます。

趣味の教室、ボランティア活動などを通して居住者、そしてスタッフが地域の一員となって参加、交流することで、仲間意識を醸成しているグループリビングがあります。お互いの関係性の持ち方がケアの質に影響を与えており、この仲間意識は大変重要です。仲間意識があるから、居住者に対する自立支援や居住者のニーズに沿ったケアにつながると考えています。

またこのような場があっても関わらなくては意味がありません。居住者は『地域』に出ることのメリットを理解し、積極的に参加することが大事です。また運営者は『地域』に出ることのメリットを居住者に伝え、場をつくり、参加を促進することも必要だと思います。

次に運営者と『地域』について考えます。グループリビングの中に地域住民が日常的に入っていくことは、グループリビングの暮らしを継続的に『地域』に見せることになり、そこで居住者が幸せそうに暮していれば、入居に繋がります。地域住民みずから入居する場合もあれば、紹介されて入居する場合もあるでしょう。実際に、趣味の教室の先生で来て

くれていた方が入居したケースがあります。運営者は意識して『地域』にグループリビングを見せ、問題があったらフィードバックをもらうことに努めれば、居住者の安全や生活の質の向上につながります。日常的に暖かい目の第三者評価が行われる仕組みだと言ってもよいでしょう。

グループリビングは、10人程度の少人数の居住者が、自分たちに必要なサービスを「地域から共同購入する」仕組みとしてスタートしました。近くに住む主婦層によるワーカーズコレクティブに頼んで、家庭的な夕食をつくってもらうというものです。しかし、居住者の加齢に伴って必要とされるケアサービスは、居住者間でニーズが異なるため、こうした共同購入には適していません。ではどうすればよいのでしょうか。

事例をみていくと、地域に根付いたサービス事業者が『地域』の人々に向けて行っていたサービスを、グループリビングの居住者にも同じように提供することで対応できていることがわかりました。介護保険制度が始まってから、NPOが制度に基づくサービスと独自のサービスを組み合わせながら、地域に根付いたケアの主体に成長していく事例が各地にみられます。そうした事業者がグループリビングの運営に携わると、居住者は地域住民の一人と同じように必要なサービスを受けることができます。つまり、「地域がサービスを共同購入する仕組み」のなかにグループリビングを包摂することが、ケアニーズの増加に対する解決の一つの方法であると思います。

グループリビングを『地域』に開放し、グループリビングのサービスと『地域』に向けて提供されるサービスを同じ平面に置くことは、グループリビングの生活の質、安心、安全、そして運営の継続性に寄与します。『地域』は仲間であり、評価者、そして利用者、協力者であるという関係性をつくりながら、各地に「地域がサービスを共同購入する仕組み」を育て、『地域』を作っていく運営者の活躍の場が広がっていくことを期待したいと思います。

慶應義塾大学 SFC 研究所
上席所員

土井原奈津江



たすけ愛の家

北海道登別市



地域に根付いたグループリビング

北国のどんより曇った町を想像しながら降りたった幌別。澄み切った空気。どこまでも青い空。北にはカムイヌプリと呼ばれる神の山がそびえたつ。東には川が流れ、今、ちょうど産卵期を迎えた鮭が水底でじっとしているのが見える。この幌別川は野鳥の宝庫、白鳥が舞い降りると言う。すぐ目の前にはショッピングセンターが、隣に内科医院と立地にすこぶる恵まれたいぶりたすけ愛。

訪問した日、もう午後の3時を回っていたような気がする。全員、居間に集まって下さり、コーヒーを飲みながら、それぞれご紹介いただいた。しばらくの沈黙の後、理事長

の星川さんが午前中の様子を楽しそうにひと言。それが引き金となって「今日、お餅つきがあったんですよ」「その後、ここのサロンで行われたカラオケ大会がまた楽しくて」「芸達者なボランティアの方が踊るとみんなが踊り出したのよねー」と話が弾む。住人にとって、このサロンで地域の方々との交流は元気の源であるように思えた。生活者9人の内90歳以上が4人、最年長の竹内さん98歳のお元気さにはびっくり。そして、全員で「たすけ愛の歌」を合唱して下さる。日頃からカラオケで鍛えた声はよく通り、特に作詞をされた宮崎さんの声は一段と高く、

思わず拍手。大感激の後、「たすけ愛をてのひら（筆者の法人）に代えて歌わせていただいてもよろしいですか」と申し出ると「どうぞ、どうぞ」といとも簡単に替え歌の許可をいただいて、楽しいお茶の時間を過ごすことができた。

私たちは小さなコミュニティを作ることで、グループリビングの住人の「自立と共生」が限りなく続くことを願っている。しかし、現実はその簡単なことではないと思っていたのだけれど…驚くことに、たすけ愛はサロンを開放し、町中を巻き込んだ大きなコミュニティがもうすでに出来上がっている。その中で生き活きと暮らされている住人たちの生活ぶりが手に取るように浮かび上がる。ちなみに、サロンではカラオケ、俳句会、麻雀、パソコン、卓球、絵手紙、歌声喫茶、囲碁、英会話、書道、短歌と盛りだくさんのメニューがある。外部からの参加者、住人問わず自由参加。最年長の竹内さんは俳句会に参加され「おーいお茶」の俳句に入選されるほど。98歳の今も俳句はいくらでもできるとか。私も真似て作ってみたが…



一根付きたる

グループリビング雪の町ー

話は行ったり来たりするが…夕食は焼き鮭、高野の挟み煮、ほうれん草のお浸し、そしてホタテ貝の味噌汁。鮭はもちろんのこと、味噌汁は貝の良いだしが出て何とも言えず美味しい。さすが北海道。ご馳走様でした。

翌日、最長老の竹内さんと星川さんと土手沿いを散歩することに。途中、橋の上から川を覗くと遡上してきた鮭が何匹も川のよどみにいるのを見つけ思わず「鮭、鮭がいる」と叫んでしまった。竹内さんが「卵を産み付けたあと、鳥に食べられないように守っているんだよ。人間よりえらいさ」とあれこれ鮭の習性を教えて下さる。海に出て行った鮭が産卵のため、再び産まれた川に帰って来る「母川回帰」は都会に出て行った人がやがてまた生まれ故郷に帰って生活を始めるのに似ているような気がする。

一面枯淡色の中、野茨の真っ赤な実があちこちに絡み合っているのを見つけ、リースにするときれいだろうなーと思いながら土手を進む。バードウォッチングの人たちと出くわす。「こんにちは!」「こんにちは!」星川さんとは誰もが知り合いなのか…当たり前のように交わす挨拶。

20年前に蒔いた一粒の種、たすけあい精神は長い活動の中でしっ



かりと幌別の町に根付き、そしてまた、グループリビングも会員の方たちに支えられ、いつの間にか幌別にずーっと前からあったように、地域に溶け込んでいる。

ー鮭戻り白鳥の舞う幌別に

しかと根付けのいぶりたすけ愛ー白鳥が5羽、川に舞い降りる姿を目で追いながら「そろそろ寒くなったので帰りましょうか?」と星川さん。竹内さんは少し疲れたようにこっくりと頷く。

昼食に熱々の北海道のラーメンをほわほわとおいしく頂いたあと、昨日あんなに寡黙だった男性の稲川さんが何やら机らしきものを取り出し、おられるのを目ざとく見つけた私。「何があるの?」と不思議がって訊ねてみた。「麻雀が好きなの」と穴戸さん。黙って麻雀台を出して来られる稲川さん。「私も寄せて下さいな」とお願いしてみると「どうぞどうぞ」と快い返事が。「それじゃ、計算できる人が必要ね」と穴戸さんが山本さんを呼びに二階へ。稲川さん、山本さん、野口さん、私と4人、(穴戸さんが来られないので)点棒を数えて始まり始まり…



稲川さんの何とにこやかな顔、鼻歌混じりで本当に楽しそう。「穴戸さんが来られたら変わりますからね」「一回りしてからに下さいよ」などと話しながら、楽しいひと時の仲間入り。あゝ、負けてばかりと思っていたら、一巡目の最後、下手な私が勝ってばんざい、どうやら勝たせて下さったようだ。そして私が参加できるように気遣って下さった穴戸さん。「ありがとうございました。続きは穴戸さんお願いしますね。また、訪問させていただきます。」と挨拶を交わして別れを告げた。

わずかに二日間でしたが、全員参加で迎えて下さった元気過ぎるたすけ愛の住人たちとの交流は本当に暖かく、楽しいものでした。

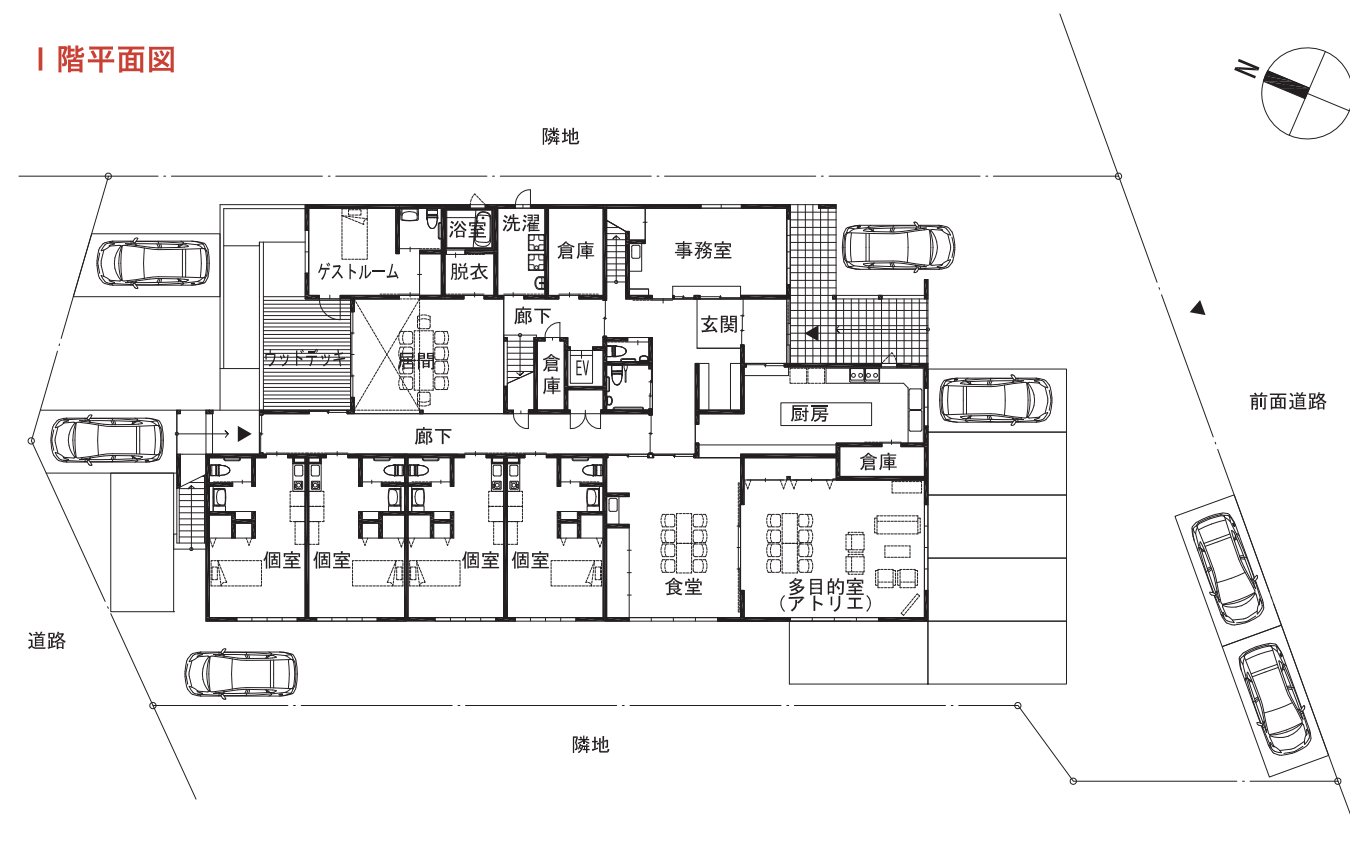
(石原智秋)

概要

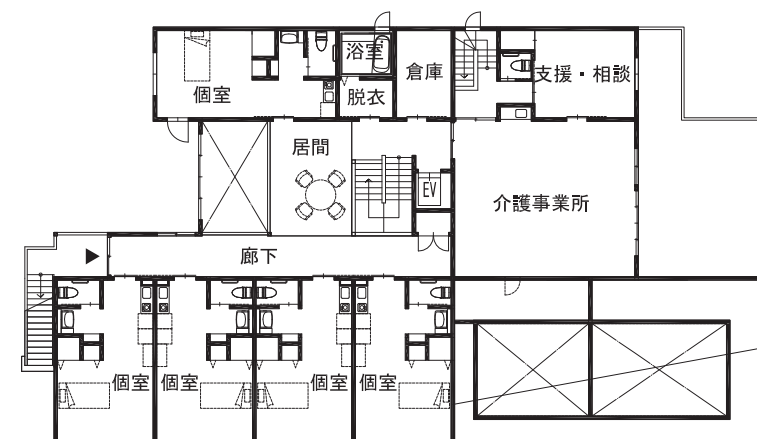
[illegible]

建築図

1 階平面図



2 階平面図



S=1:300

あやめの里

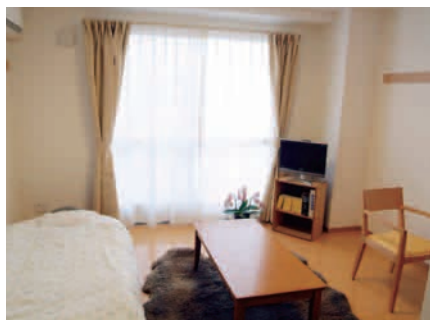
奈良県奈良市



共に暮らす「普通」の住まい

よく晴れた秋の日が少し傾きかけたころ、「高齢者生き生きグループリビングあやめの里」に併設しているデイサービスセンター「介護予防サイクルハウスあこだ」を訪ねました。案内された「あやめの里」は、同じ建物ながら「あこだ」とは玄関を異にしており、一般の住宅として明確に位置づけられています。

一階には広々としたひと続きのキッチン・食堂・居間・アトリエ、二つの浴室、車いすのまま使用可能なトイレ、そして今回使わせていただいたゲストルームが、二階には居住者十人の居室があります。広い空間の南に面した大きな窓のすぐ脇を近鉄奈良線が頻繁に行き来するのですが、不思議なくらい気になりませんでした。夕食の準備にヘルパーさんが来るまで、その空間は穏やかな



静けさに包まれていました。

夕食は二つのテーブルに分かれていただきます。私はAさん、Bさん、Cさんという三人の方のテーブルにおじゃましました。居住者の方が集まると空間は一変、明るい雰囲気になります。毎夕、全員がそろって食卓を囲むことはあまりなく、それぞれの都合でたいい誰かが欠けていると聞きました。また、会話が弾む食卓というよりも静かに食事をし、食べ終わると自室に戻っていく方が多いようです。開設当初から入居しているAさん、Bさんは笑いながら、「今は銘銘で静かに晩酌を楽しんでいるけれど、入居初日に、初対面ながら酒盛りをしたんですよ」と語ってくれました。

当初は、共用空間の掃除や野菜作りなど居住者みんなで協働すること多かったそうです。けれど、しだいにその機会はなくなり、居住者の健康状態の差が大きい現在は掃除もヘルパーさんをお願いするようになったとのこと。生活の中での困りごとがあれば、居住者同士で解決策を模索するのではなく、もっぱら運営責任者のNさんに相談するそう

です。居住者の方々の自立した生活を尊重しつつ、さりげなく気配りなされているNさん。その姿をみれば、居住者の方が頼りにする理由がよくわかります。

居住者相互のかかわり合いは希薄なようですが、それは「無関心」であることは違うと感じました。いくつかエピソードを挙げましょう。ヘルパーさんが来る前に食堂に顔を出した居住者のお一人が、そこに居合わせたAさんに「今日はお粥にしてくれへんか」と声をかけ、Aさんは「ヘルパーさんを見たら言っておきます」と応じました。また、少し遅れて夕食に降りたBさんは、食卓を見渡して「あの人今日は食べんのかな？昨日は食べとったのに」とつぶやきました。そうした滞在中の幾つかの場面から、お互いを気遣う様子が見てとれました。

居住者の方々は「短期滞在者」である私のことも気にかけてくださいました。夕食時に「明後日、法隆寺に行きます」と話したところ、食後にCさんが大きな奈良市周辺地図を食卓に広げ、Aさん、Bさん、そしてDさんも加わり、一番便利な



行き方について検討。「自然発生的プチ協働」といえるようなひと時を有り難く思うとともに、共に住まう生活の一端を見せていただいた気がしました。

お借りしたゲストルームは居心地のよい洋室で、奈良盆地の朝晩の冷え込みにもかかわらず、温かくぐっすり休むことができました。朝、柔らかな日が差し込む広い空間に座っていると、何人かの方が入れ替わり降りてこられました。歴史が好きだというDさんは講座を聴講して奈良の史跡をよく訪ねるのだそうです。法隆寺への行き方もなるほど詳しくははずと納得。Dさんと入れ替わりに階下に降りてきたEさんとお話ししていると、今度はAさんが、わざわざコーヒーを入れにきてくれました。コーヒーメーカーから深い香りが立ったとき、この空間は居住者の方々にとって生活の場なのだと改めて認識しました。

出発の朝、荷物をまとめ玄関に置いたとき、Aさんがピンク色のはっぴ姿で外から戻ってこられました。今日はすぐ前にある病院で秋のお祭りが開かれるため、早朝から手伝っ



ているとのこと。Aさんにお付き合いいただいてBさんにお別れのごあいさつをしました。「Cさんにも」というと「Cさん、今日は早くから仕事に行く日ではないか」とAさん。ひとつ屋根の下で共に暮らしているからわかることといえるでしょう。居住者はそれぞれ、ここで暮らしはじめるまでの長い人生の中で、自分の生活スタイル、家族や友人との結びつきを築いています。「各人がそれまでの生活を保ったまま、新しく出会った人々と共同で暮らすという住まい方をどう理解すればよいの

か？」訪問前から抱えている間に、短い滞在期間で答えが出せるはずありません。が、ひとつ気づいたことがあります。

それは、居住者間の関係を深める機会となる定期的な「協働」は行われなくとも、互いの気配を感じながら、言葉を交わしながら、食事時に欠けている人を気かけながら、日々の生活の営みの中で、「ここでの共同の暮らし」が形成されているということです。「あやめの里」という住まいの緩やかな「境界」（アイデンティティ）は確かにあると感じました。またそれは、近隣のお祭りへの参加、併設のトレーニングジムや温水プールでの地域の人びとの交流を通じて、「あやめの里」が地域に開かれ、根付いていることを示しているようにも思います。

買い物には少し不便だけれど、すぐそばに病院があり安心な、静かだけれど人の気配がする、ちょっと大きな「普通」の住まい。短い滞在でしたが、「普通」の暮らしがそこにあるから居心地よく過ごさせていただけたのではないかな。そんなことを考えながら、あやめの里を後にしました。（近兼路子）



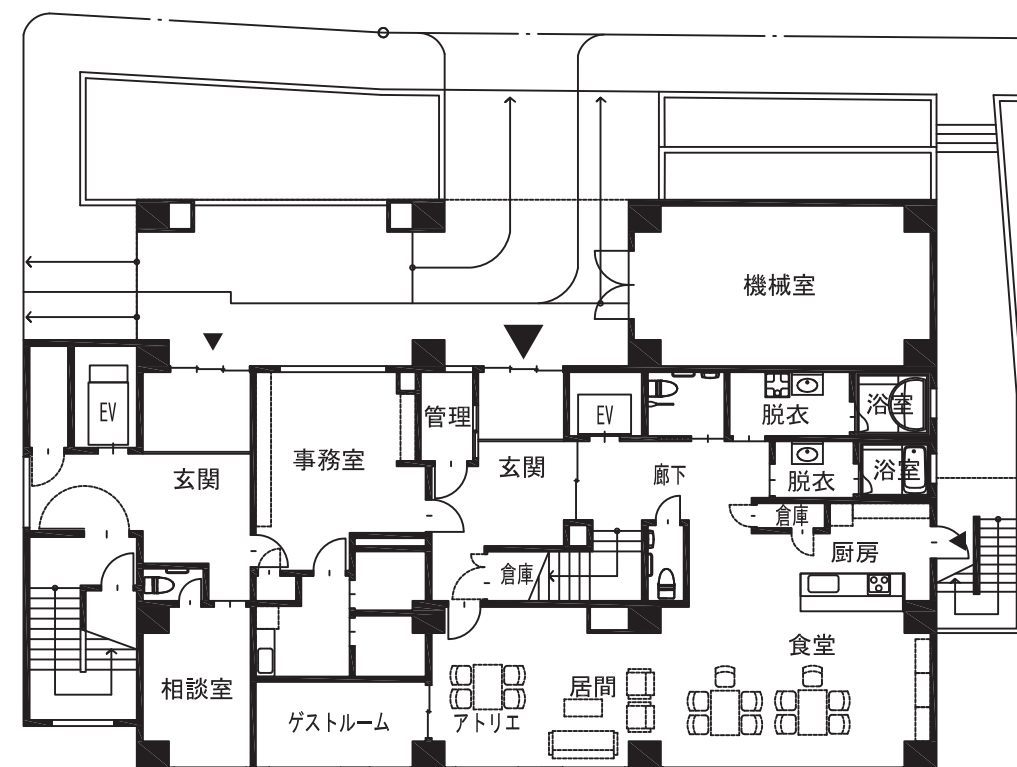
概要

[illegible]

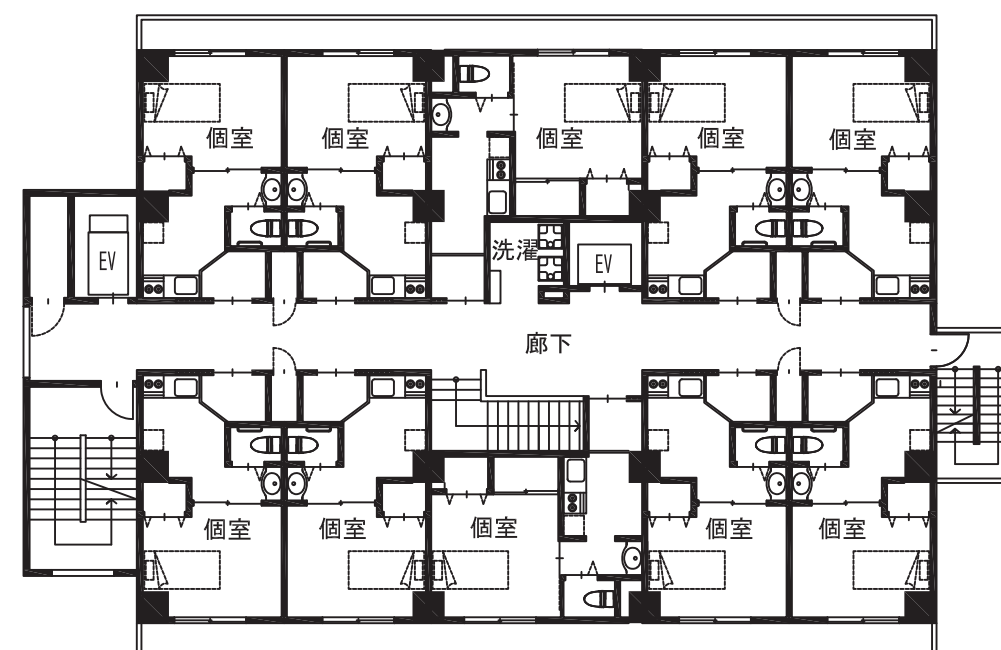
建築図



1 階平面図



2 階平面図



S=1:200

明日への風

広島県東広島市



自由で安心な暮らし

東広島市は、広島県の中央部に位置し、広島市の東にある人口19万人の市です。中心地である西条町は酒どころとして有名です。毎年10月には「酒まつり」が催され、多くの観光客が訪れ、盆地の周囲を囲む山々や里山のアカマツ林を背景に、赤瓦と白壁の建物が点在し、その手前に水田が広がるという景観をなしています。

「グループリビング明日への風」は、JR八本木駅より徒歩20分ほどの田畑が広がる、とても閑静な場所に立地しています。



「グループリビング明日への風」を運営するNPO法人地域福祉活動支援協会 人間好きの代表理事の渡邊壽江氏は以前より、デイサービスや介護支援センター、ヘルパーステーション、訪問看護ステーション、小規模多機能を運営されていました。そんな地域に根ざした日々の活動の集大成としてのグループリビングを思い描かれJKA補助事業で平成22年にグループリビング「明日への風」を開設しています。その後、障がい者就労継続支援B型作業所を運営され、来年にはコミュニティ

カフェを開設される予定で、地域ニーズを汲み取りながら事業をされています。

「グループリビング明日への風」は、地域との関わり合いが活発です。近隣の小学校と交流するため、生活者が学校を訪問しています。また紙芝居を通しての児童との交流もあり、児童からお礼にカレンダーや絵手紙をいただいたこともあります。

周辺農家からの作物が提供され、直売所の運営を行なっています。地域の人々は、各施設で行う高齢者と生活者が共に行う行事の企画・運営を継続しています。

防災訓練は年2回行い、隣近所の住民が参加し協力しています。

ボランティアの参加募集もしています。

また、生活者が要介護状態となってもヘルパー、訪問看護などのサービスの利用により最後まで住み慣れたところで、過ごす「終の棲家」としても地域内で認識されているようです。

平成24年に、デイサービス・ヘルパーを利用されていた男性が「グループリビング明日への風」に入居

されました。そして彼は、親族が遠方でしたが、主治医の往診、訪問看護師、ヘルパー、宿直の協力などのサポート体制のもと、ターミナルケアをされたそうです。

「ご本人は、至って無口でご自分の意思を出さないひとでした。でも最期は、満足され、感謝されました」とスタッフの方が語って下さいました。

2日目に建物内外を見学させていただきました。周辺を考慮したのでしょう。平屋建て、落ち着いた佇まいとなっています。

玄関を入るとホール介して左手に事務室、厨房があり、正面には多目的室があります。多目的室は和室になっており、床高は車いすの座面を考慮してつくられていました。右手奥には約24.5㎡の個室が4室と地域の住民にも開放している「足湯」の設備もあります。居間（食堂）を進むと左手にアトリエ（ふれあいホール）があり、デイサービスにも利用されとのこと。

壁一面に生活者・地域の高齢者たちの作品が展示され、またふれあいホールは、地域の高齢者との交流の場になっている様です。

アトリエにはサンデッキが有り、階下の菜園へと繋がっていてシーズンには野菜・花々を育てている様です。左手には共用のトイレ、洗面・脱衣室、浴室（大・小）2室あります。奥には、個室（約24.5㎡）が4室、物品庫等収納部分が配置されています。

現在の生活者は、女性8名ですが、待機者が4、5名入居待ちの状態とのことです。

ある生活者は、「ここは自由で、安心して生活ができて大変満足しています」と笑顔で話して下さいました。



個室を観せて頂くと、ご自身の習字、手芸の作品が所狭しと飾ってありました。「以前の住まいには、まだ沢山あります。でもここでの作品づくりが生き甲斐なんです。」と。

また、ある生活者は、食堂のテーブルに切り花を楽しそうに生けていました。むかし生花を嗜んでいたそうです。

その日の夕飯を生活者の皆さんとともに頂きました。料理は、デイサービスセンター「つむぎ」で調理され、配食されたものを厨房で温め

配膳しています。全食とも手作りの食事、3時のおやつも自家製でした。皆さん「美味しい、美味しい」と笑顔で食事を済ませ、語らい、トランプゲームに興じて一時を過ごし、個室へと戻られました。

「グループリビング明日への風」は、地域の住民を巻き込み、コミュニティの核となっているようです。

生活者の皆さんは、自分らしく自由で、安心な暮らしを送られていることを実感した訪問でした。

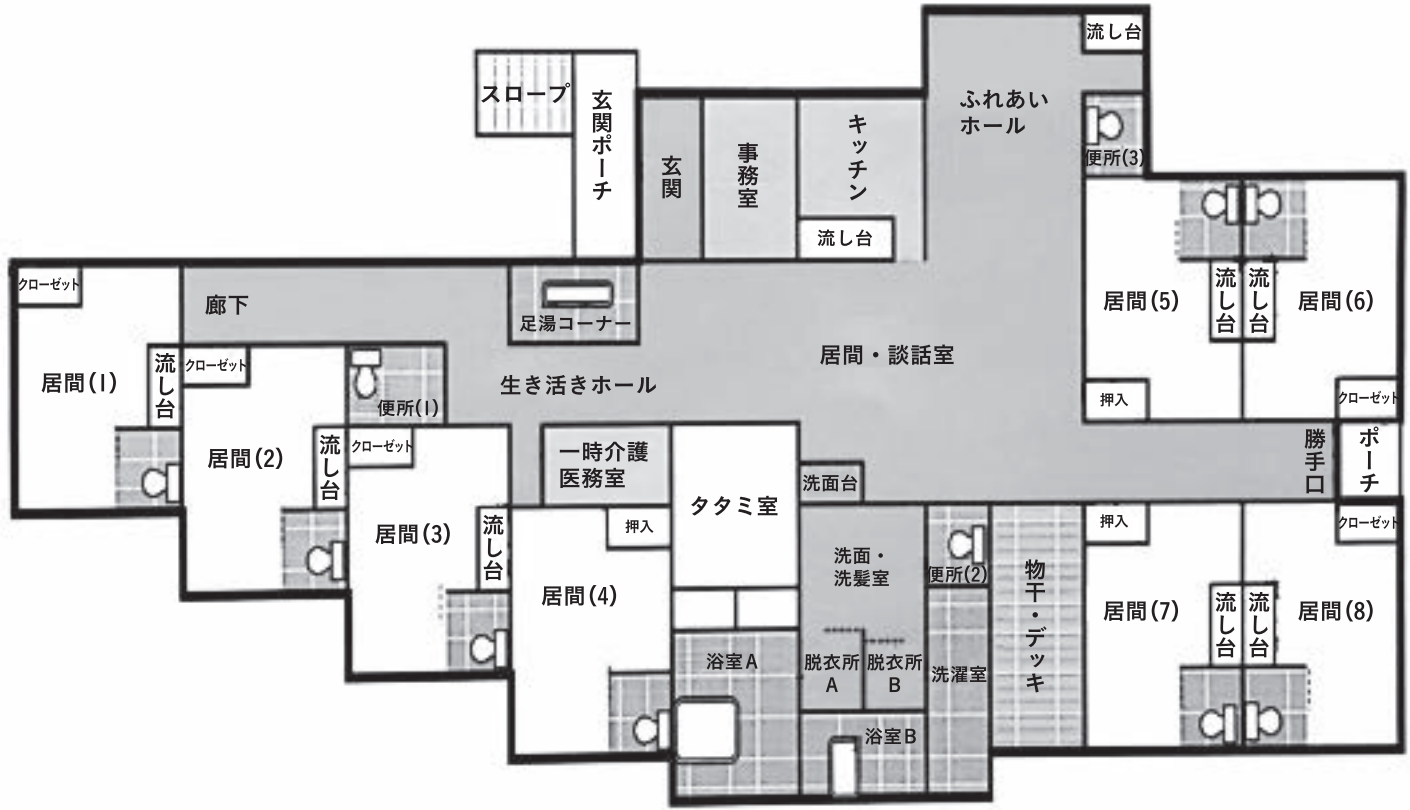
（中村雅充）

概要

名称	明日への風
所在地	広島県東広島市八本松飯田8丁目4- 5 5- 5
アクセス	JR 八本松駅 徒歩 20 分
事業スキーム	土地賃貸 / 建物所有
事業主体	特定非営利活動法人 地域福祉活動支援協会 人間大好き
開設時期	2010 年 4 月
構造・階数・延床面積	木造・1 階・449.3㎡
戸数	8 戸
居室規模	25㎡
居室設備	便所・洗面・ミニキッチン
共用部	食堂・キッチン・居間・浴室・トイレ
併設施設・機能	デイサービス
入居契約	賃貸借契約
利用料	敷金 90,000 円 家賃 45,000 円 管理費 10,300 円 共益費 5,150 円 夜間管理費 1,545 円 × 日数 食費 46,500 円
入居条件	4 0 歳以上（障害者手帳、介護保険 2 号被保険者、障害者区分 2） 5 8 歳以上（入居時自立～要介護 1・2）
食事サービス提供者（朝）（昼）（夕）	専属スタッフ（正規雇用）
掃除サービス提供者	専属スタッフ（正規雇用）
掃除サービス提供範囲	共用部分と個室部分
その他の生活支援サービス提供方法	専属スタッフ（正規雇用） 外部委託
提供している生活サービス	買い物の代行 ゴミだし 個室の清掃 介護予防を中心とした運動教室等
夜間の職員の有無	有
職員のいる時間帯	終日
居住者の生活把握の方法	朝、晩の安否確認。リビングでの会話と食事
居住者ミーティング	有
居住者の外出時のルール	事前に連絡（外出用紙あり）
地域住民とのコミュニティ形成のための支援	近隣住民との交流イベントの実施、支援 地域のボランティアの受け入れ 地域の行事情報、活動に対する情報の積極的な提供
サービス付き高齢者向け住宅の登録の有無	無
有料老人ホームの登録の有無	有

建築図

1 階平面図



S=1:200

COCOたかくら

神奈川県藤沢市



自己決定と合意形成がある自由な暮らし

COCO たかくらは、グループリビングの草分けである COCO 湘南台を運営する NPO 法人 COCO 湘南の3つ目のグループリビングとして2006年にJKA補助でつくられました。

COCO たかくらの最寄りの駅である小田急江ノ島線長後駅を下車すると駅前にはコンビニのみの静かな駅でした。すぐ近くの県道22号沿いには各種飲食店があり、静かながら活気も感じられます。COCO たかくらは、バスに乗れば最寄りの停留所から徒歩5分、長後駅から歩くと20～25分の距離にあります。

COCO たかくらは、明るい住宅地の中にあり、周りには果樹園や市民農園、神社などがあります。また畑の中を5分歩くと境川沿いに遊歩道があり、自然に恵まれた素晴らしい



環境にあります。

玄関を入るとすぐにアトリエがあり、アトリエからそれぞれの個室へと繋がっています。アトリエには3畳の和室があり、入居者が書かれた書が掛けられており、安らぎと品のある空間になっています。

住まいの中には、生活の細々としたことをサポートするライフサポーターが10時から17時まで常駐しています。おしゃべりがしたい人は10時と15時にアトリエに集まり、ライフサポーターとお茶を飲みながら世間話をしているそうです。お話が好きな人や外出が難しい人にとっては夕食と合わせ、1日に3回会話ができる場が用意されているようです。

アトリエでは、画家や書家の方が自室で作業が難しい大作の絵や書を作られていました。他の場所で作品の制作ができる場所がなかったため、ここに住んで本当に良かったと喜んでいらしたのが印象的でした。このような趣味や仕事を持っている方にとっては最適な環境です。

夜、お二人のお部屋にそれぞれお招きいただき、絵を見せていただい

たり、お茶をご馳走になったりしました。お部屋はキッチン、洗面、トイレ付きの25㎡の個室で、プライバシーのある生活をされていました。お一人の方は小鳥を飼っていらっしゃいました。ここでは犬や猫のペットを飼うこともできるそうです。居住者の中には、まだ働いている人や子供のためのおもちゃ作りなどボランティア活動に熱心な方もいらっしゃるそうです。

夕食を居住者の方達と一緒させていただきました。メインディッシュは鮭の照り焼きと野菜の付け合わせ、これに小鉢、味噌汁、ご飯、漬物がついて味もボリュームも満点でした。食べきれず自分の器に入れて持ち帰り、翌日の朝食や昼食にする方もいらっしゃいました。COCO たかくらでは、食事は、朝食、昼食は自分で用意することになっており、夕食はワーカーズコープおリーぶに所属する地域の主婦が毎日1人で作っています。作る人は6人交替なので同じ料理でもそれぞれ違う味が楽しめるそうです。

NPO 法人 COCO 湘南のグループリビングでは、共同性のある暮らし

を目指し、具体的には1ヶ月に1回居住者のミーティングがあり、理事長や担当理事が加わり生活に関する意見交換やイベントの計画などをするそうです。居住者の中から1人コーディネーターが選ばれ、みんなの意見のとりまとめをされています。

COCO たかくらは開設から9年が経過し、居住者も高齢化し介護ニーズが高くなりつつあるそうです。ここでは理念に「自立」という言葉がありますが、病気や介護ニーズが高くなった場合、具体的に看護や介護はどうしているのか疑問を持っていました。まずここでの「自立」の定義は、着脱ができるなどの介護保険上で言われている身体的な「自立」ではなく、身体状態は決して良くなくても、自分で自己決定、自己選択できることが「自立」と捉えているそうです。介護、看護、医療サービスに関しては、NPO 法人 COCO 湘南は、地域のサービスを利用することになっていました。高齢者住宅の事業者がサービスを持っている場合、事業者によっては必要以上にサービスを提供することや他の選択肢がな



くサービスの質に問題がある場合があると聞きますが、COCO たかくらは自分でサービスを地域から選択できるため、質の良いサービスや自分に適したサービスを選べる可能性があります。しかし、そのためには居住者自身がサービスの知識とともに地域にあるサービスの情報を持つこと、緊急時の対応について自分自身がどのようにして欲しいか、またサービスを利用する時の条件などを自分で程度考え、周囲になんらかの方法で伝えておくことが必要です。運営者やケアマネージャーからの情報や相談は大切ですが、自分に

適したサービスを受けるためには、それらをもとに自分の考えを整理しておくことが重要です。

ここでの暮らしはサービスを地域の事業者から買う点では在宅と同じです。しかし在宅とグループリビングの違いは、グループリビングに住めば、ライフサポーターの支援や相談、日常の会話、居住者同士の助け合い、普段からの緩やかな見守り、病気の時に住まいの中に誰かがいるという点では、在宅の1人暮らしに比べてはるかに人とのつながりや安心感があります。

地域との関係性は、近所の人が畑で作った野菜を持って来てくださり、また雪が降った時には雪かきをしてくださるそうです。地域の自治会にも参加しているということです。COCO たかくらで、映画鑑賞会を開き、地域の人を招くこともあるそうです。近隣といい関係を保っていることが窺えました。

COCO たかくらでは、居住者は趣味や仕事を楽しみながら自由に自分らしく生活されていました。このようなサービス機能を持たないグループリビングでは、どのようなサービスの質を保つ上で重要なことだと思います。(弓削久美子)



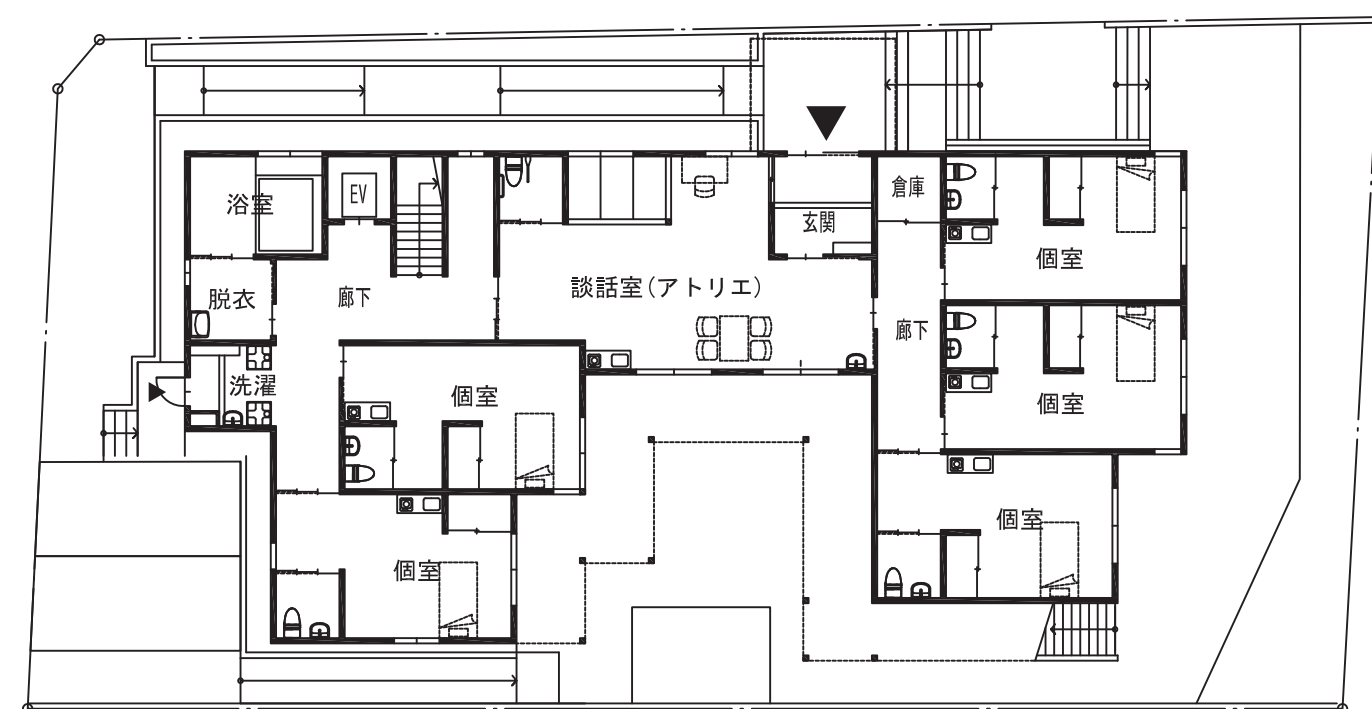
概要

[illegible]

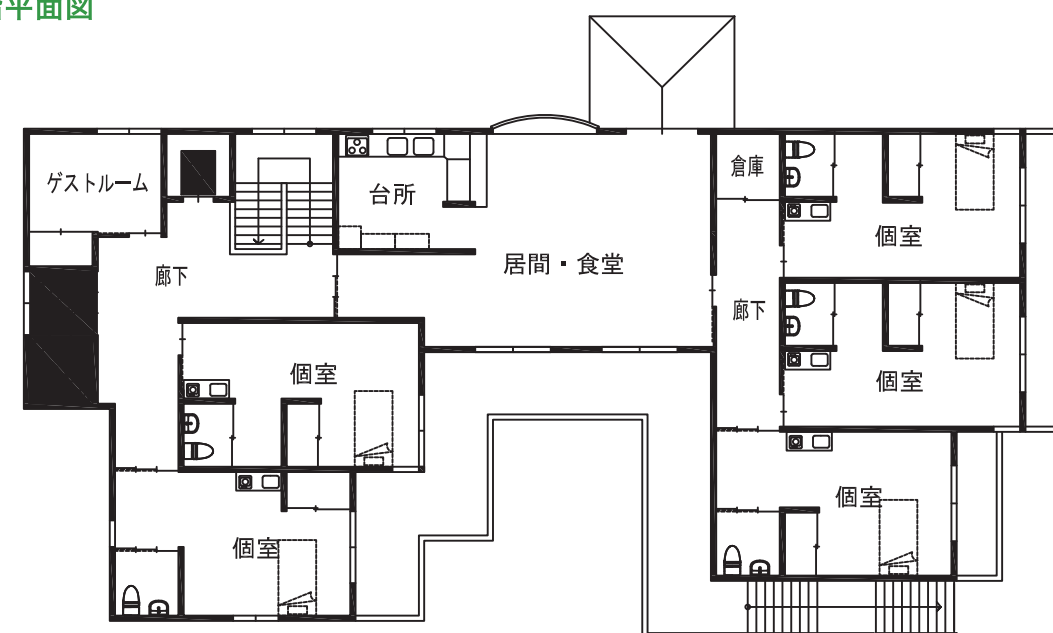
建築図



1 階平面図



2 階平面図



S=1:200

家計簿

* ○印の項目は居住者が直接グループリビングに支払う料金です。
○印以外の項目は各居住者が自分の生活に応じて支払う料金です。

たすけ愛の家

Oさんの家計簿

項目	金額 (円)	備考
○家賃	50,000	
○食費	35,000	昼食・夕食
○共益費	12,000	水道料・共用部分の電気、暖房
○家政委託費	15,000	
電気料	9,000	夏季は 3,000 円
電話料	2,000	
自治会費 (GL内)	3,000	
新聞代	3,000	
病院代	3,000	
介護保険利用料	5,000	要支援 1
その他	13,000	朝食代 おやつ代 本代等
合計	150,000	

あやめの里

Kさんの家計簿

項目	金額 (円)	備考
○家賃	55,000	
○食費	34,500	朝食・昼食・夕食
○共益費	25,000	水道料・共用部分の電気等
○生活支援費	5,000	共用スペースの掃除、安否確認
電気料	5,000	
電話料	1,500	
自治会費 (GL内)	-	
新聞代	823	
病院代	7,000	
介護保険利用料	5,800	要支援 2
その他	10,000	本代、交際費等
合計	149,623	

明日への風

Sさんの家計簿

項目	金額 (円)	備考
○家賃	45,000	
○食費	36,890	朝食・昼食・夕食
○管理費	10,300	
○共益費	5,150	
○夜間管理費	48,895	
電気・灯油料	1,500	
電話料	2,000	
自治会費 (GL内)	—	
新聞代	0	
病院代	3,000	
介護保険利用料	33,818	要介護 2
その他	10,000	
合計	196,553	

COCO

たかくら

Xさんの家計簿

項目	金額 (円)	備考
○家賃	60,000	
○食費	20,400	昼食、夕食で 30,000 円だが、 夕食のみなので 9600 円返金
○共益費	17,000	
○家政委託費	31,000	
電気料	12,700	冬季（夏季は 5,600 円）
電話料	6,000	
自治会費 (GL内)	0	
新聞代	4,000	
病院代	9,500	
介護保険利用料	0	
その他	32,500	
合計	193,100	

訪問記 著者のプロフィール



石原智秋
世界遺産（姫路城）のある兵庫県姫路市に隣接する高砂市でグループリビングでのひらを開設しています。



近兼路子
慶応義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程在籍中。家族以外の他者と暮らす高齢者を対象に家族社会学の観点から研究しています。

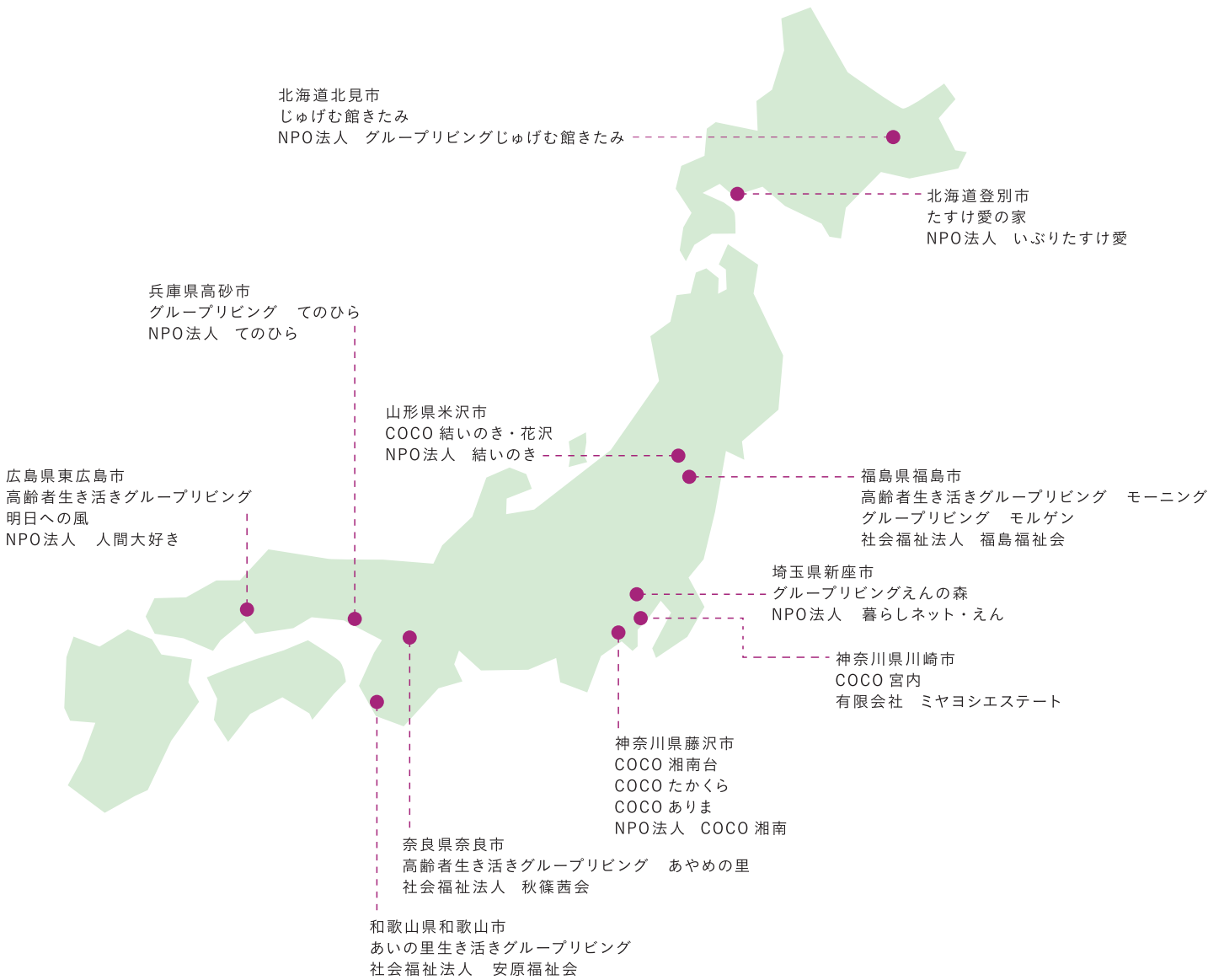


中村雅充
建築業界で40年、お年寄好きが高じてグループリビングの運営に乗り出した建設会社の経営者



弓削久美子
さいたま市で税理士をやっています。近い将来古民家カフェを併設したグループリビングを目指し、勉強会を立ち上げようとしています。

グループリビング運営協議会会員のグループリビング一覧



グループリビング運営協議会会員募集中

グループリビング運営協議会はグループリビング運営者や運営者をめざす団体、個人の相互支援、相互啓発とともに、全国に向けてグループリビングの普及啓発活動、調査研究等を行い、我が国における豊かな高齢者居住の推進に寄与することを目的とします。

会員種別	内容	年会費（一口）
正会員	運営に参加できる団体	20,000 円
	運営に参加できる個人	10,000 円
賛助会員	活動を支援する団体	10,000 円
	活動を支援する個人	10,000 円
学生会員	活動を支援する 18 歳以上の学生	1,000 円

連絡先 事務局 土井原奈津江
〒252-0804 藤沢市湘南台7-32-2
NPO 法人 COCO 湘南内
TEL 0466-46-4976 FAX 0466-42-5767

 この訪問記は公益財団法人 JKA 補助事業「お年寄りが幸せに暮らせる社会を創る活動」で作成しました。



発行日 2016年3月20日
発行 〒960-0211 福島県福島市飯坂町湯野字梁尻1-1
社会福祉法人福島福祉会
編集 土井原奈津江
デザイン 池田紀久江